

## 麻生太吉翁と川田十氏

矢島 嗣久

筑豊の炭坑事業家、麻生太吉は別府で温泉熱を利用して麻生農園や山水園を造り、別府市の開発に寄与した。川田十氏は（株）麻生商店、山内農場（福岡県飯塚）で採炭の廃土を利用した栽培の研究と農業指導を実施後、病のため来別して麻生農園および山水園の管理を任せられ、以後別府を中心として農業指導に活躍した。

### 一 麻生太吉の出生と生い立ち

麻生太吉は安政四年（一八五七）筑前国嘉麻郡立岩村字栢ノ森（現福岡県飯塚市東南部）に、父賀郎<sup>がろう</sup>三十八歳、母マツ三十三歳の長男として生まれる。幼名を鶴次郎といた。鶴次郎には二人の姉、ウメ、フユがいた。

麻生家は代々庄屋の家系である。

鶴次郎は明治五年（一八七二）十六歳の時、名前を太



麻生太吉翁

吉と改める。父賀郎が隠居して、太吉が家督を相続した。この年、太吉は目尾御用山（飯塚市東北部）において、石炭採掘事業に着手した。

翌六年二月、太吉は妻ヤスを迎える。太吉十七歳。

## 二 九州産業界への取り組み

明治十三年（一八八〇）、二十四歳の太吉は父賀郎に従って綱分燧石（元嘉穂郡庄内町中央部、町役場付近）

に、その事業者としての第一歩を印した。広辞苑によれば、燧石とは火山岩の侵入により熱せられて変質した石炭。一種の天然コークス。筑豊炭田における俗称。また、一説には石灰を焼く燃料のことをいう。

明治二十年（一八八七）五月、父賀郎が死去する。享年六十八歳。太吉、三十一歳。

同年九月、太吉の三男太郎が生まれる。

明治二十九年（一八九六）十二月、山内炭坑（現飯塚市東南部）を開坑する。

明治三十二年（一八九九）七月、太吉が衆議院議員に当選する。四十二歳。

明治四十一年（一九〇八）、麻生太吉が石炭廃坑地の利用更生の具体的方法を研究するため、当時農務省の技師をしていた恩田鉄彌の指導のもとに飯塚市大字立岩字山内に開設したのが山内農場である。最初のうちは試験段階にあったため経営的に失敗を重ねたが、その後の研

究の進展とともに軌道に乗る。花卉園芸を主体として果樹、蔬菜類にも手を広げ、生産物は大部分が博多方面へ出荷された。この山内農場は生産とともに地元業者に対する技術指導的な任務も果たすようになり、好評をもって周囲から迎えられた。

明治四十三年三月、山内農場を開く。

当時の産出物は花卉園芸が、百合、カーネーション、フリージア、アマリリス、チューリップ、スイトピー、そのほか観葉植物の温室もの、また試作物としては果樹が桃、柿、ブドウ、ならびに一般蔬菜類などであった。

明治四十四年、太吉の三男太郎の長男太賀吉（太吉の孫）が出生する。太吉、五十四歳。

大正八年（一九一九）三月、三男太郎が死去する。享年三十三歳。

## 三 川田十技師

川田十は、四国徳島県徳島市富田裏町において明治二十二年（一八八九）五月十五日に生まれた。明治四十年（一九〇七）三月、徳島県立農業学校を卒業後、農林

省興津園芸試験場練習生（第一期生）となり、明治四十二年に終業後、徳島県立農事試験場の園芸部主任として赴任する。

興津は静岡県清水市の北東部の一地区。旧興津町。東海道の宿場町として繁栄、明治以降は別荘地でもあった。東海道線、国道一号線、五二号線が通じる。興津川河谷はミカンの多産地。

現在、静岡県清水市興津には農林水産省果樹試験場柑橋部が置かれている。

翌四十三年二月、川田十主任に興津園芸試験場長であった恩師農学博士・恩田鐵彌氏から福岡県飯塚市の麻生商店株式会社へ強い入社を要請があり、麻生農場主任として赴任することになる。当時、川田十の年齢は二十二歳。筑豊の炭坑事業家であった（株）麻生商店の麻生太吉は、炭田の廃石の処分利用について思案していた。

ボタ山の廃土利用研究は、筑豊炭田だけのものではなく、全国の炭田のための犠牲的な試験研究の計画でもあった。麻生本宅のある柏ノ森の東南東方、嘉穂郡庄内町との隣接地に位置する山内農場において明治四十三年から

数年間、あらゆる試みはことごとく失敗に終わり欠損が続いた。川田十は麻生太吉からその研究の実行を任せられ、熱心にその成果を期待し、日夜努力した。その成果が大正三年（一九一四）にやっと果樹の一部に花が咲くようになり、根葉類以外の葉菜類や、果樹の大半が栽培に可能であると立証できた。当時、太吉五十七歳、川田十は二十五歳。

また、麻生太吉は公共事業、特に農業の発展のため福岡県嘉穂郡内の町村長に依頼し、同社の山内農場で農業関係、果樹園芸の実地教育を実施し、その指導を農場長の川田十主任に任せさせた。この教育は、大正十年（一九二一）、初期の目的を達成し、中止するまでの受講者は百数十人に達している。当時、川田十技師は三十二歳。

川田十は大正九年一月、徳島県生まれの夫人ヒサと結婚した。大正十年三月には長男の計かずが生まれる。

川田主任はこの頃から、入社以来の苦労や疲労の連続で、重症の神経痛となり、実弟、川田紀夫（花卉専門）に山内農場を任せ、大正十一年九月、（株）麻生商店所有の別荘地がある大分県別府で静養することになる。そ



若き日の川田十氏（左）

して、別府が生涯の生活地となった。

川田十は、(株)麻生商店が所有する別府の土地、二十万坪(六六万平方メートル、六六ヘクタール)と泉源五か所および山水園(麻生別荘)の管理責任者を命じられるとともに温泉熱利用栽培に関する研究を命じられ、後に温泉熱利用の温室・温床による蔬菜等の栽培で第一人者となった。

#### 四 別府山水園

別府の土地でさん然と光り輝く名園の別荘は麻生太吉が建てた「山水園」である。場所は山の手町十七組一にあり、現在は「吉兆庵 紅葉迎賓館(山水園)」となっている。

この吉兆庵には、現在檜皮葺、けやき造りの薬医門形式の正門があり、「大分県国民休暇村協会 別府支所」の看板がかかっている。

薬医門とは、本柱の後方に控柱二本を建て、切妻屋根をかけた門。大規模なものは正面を三間(本柱四本)とし、控柱も四本とする。

大正二年(一九一三)、麻生太吉を始め、福岡県下の有力な炭坑主数名が、共同で敷地面積一万坪の別府山水園を買収することになった。その後、太吉以外の炭坑主はそれぞれ他の別荘地を買取ったので、山水園は完全に麻生太吉の所有となった。その後、隣接地を買増して当時二万六千六百坪(八万七千八百平方メートル、二九ヘクタール)を有する大庭園となり、別荘を建築した。太吉五十七歳。

当初は、現明豊高等学校（旧明星高等学校、平成十一年四月から合併により改称、野口原）前の道路を隔てた南側にある山の手町十七組の現「愛の里サンヴィラ」および「青山整形外科クリニック」等を含む山水園北側の区域も株式会社麻生商店が所有していた。

山水園の当時の正門は、現在地の薬医門から百メートル手前、すなわち北北東側、現在明林堂青山書店西側にある小さな公園の北側付近にあった。

麻生太吉は一人で別荘を利用するということはなかった。庭内に豪壮な温泉を開いて「山水泉」と名付けた。更に一棟を築いてこれを解放し、関係者および社員の保養所としての宿舎とした。

園内にある太吉の別邸の構えは相当に大きかったが、木造二階建て、用材は質素をきわめ、床柱さえも節を露出した材料だった。太吉はときおり別府を訪れたが、二、三日の滞在が精一杯で、一年中一度も来別しないこともあった。

この山水園が有名なのは、四百本の桜の樹と芝生の庭園、二か所の築山、二か所の滝、飛び石や藤棚などがあ



山水園 全景

る池が六か所、その他花木が多くあり、四季を通じて楽しめる市内絶景の庭園だからである。庭園外側には西側から南側にかけて櫻の林があった。

園内の樹林には、桜、松、楠、せんだん、つつじ、紅梅、柴神、柴栗、南天、びわ、花桃、櫻、竹など、草花にはシャクナゲ、すいれん、蓮、菖蒲、蒲(がま)など、野鳥はうぐいす、きじばと、ひよどり、つぐみ、すずめ、おしどり、ふくろう、その他、鯉、鮒等を含む魚介類、くわがた、かぶと虫の昆虫など多数が棲息していた。

大正十年(一九二一)六月、旧別府地獄巡り電車敷地(京大地球物理学研究所用地、後述)から伊藤飛行士が複製式飛行機を飛ばし、別府上空飛行の初めとする。現在、川田家には昭和四年頃写した山水園の航空写真が数葉保存されている。

大正十年十二月、別府町内の県道地獄巡り循環道路が県費により着工のところ完成する。

大正十二年(一九二三)五月二十三日、久邇宮邦彦王殿下は、御入内(昭和天皇の皇后)の儀が定まった姫君良子女王殿下の見聞を広めるため、俱子妃殿下(島津家

出身)、妹姫君信子女王殿下(のち京都東本願寺門主に嫁ぐ)の四方お揃いで九州を御巡遊され、別府公園で学童の遊戯をご覧になり、町民の歓迎を受けられる。

別府では山水園に隣接した和田豊治氏別邸「到楽荘」に数日間御滞在された。殿下はかねて太吉と面識があったので、一日山水園御成りを申し出された。太吉は喜んで、邸内外万端の用意をして御四方をお迎えした。

和田豊治は中津出身の実業家で、大正五年(一九一六)に富士紡の社長となる。富士紡をはじめ倒産寸前の数々の大企業を立て直した。彼が母のために大正九年(一九二〇)に別府山の手に到楽荘(現中山荘)という別荘を建てた。

これはアメリカ屋の設計施行により建築、本格的な洋室部分はステンドグラスの窓や照明器具、アンティークな家具に至るまで大正ロマンを感じさせる室内になっている。別府市民にとって大正期の文化交流の歴史を感じさせる貴重な文化遺産である。

当日は、久邇宮殿下、妃殿下、両姫宮殿下、御四方が山水園の別邸にお成りになられ、階下の広間にくつろが

長気園

- ④ 温室
- ⑤ 温室
- ① 事務所
- ② 社宅
- ③ 堆肥小屋

南満州鉄道 (滿鉄) 又は 南州鉄道

京都大学物理学研究所

富士見通り

現ビコーコンプラザ

県道 52 号線 (至 流川通り)

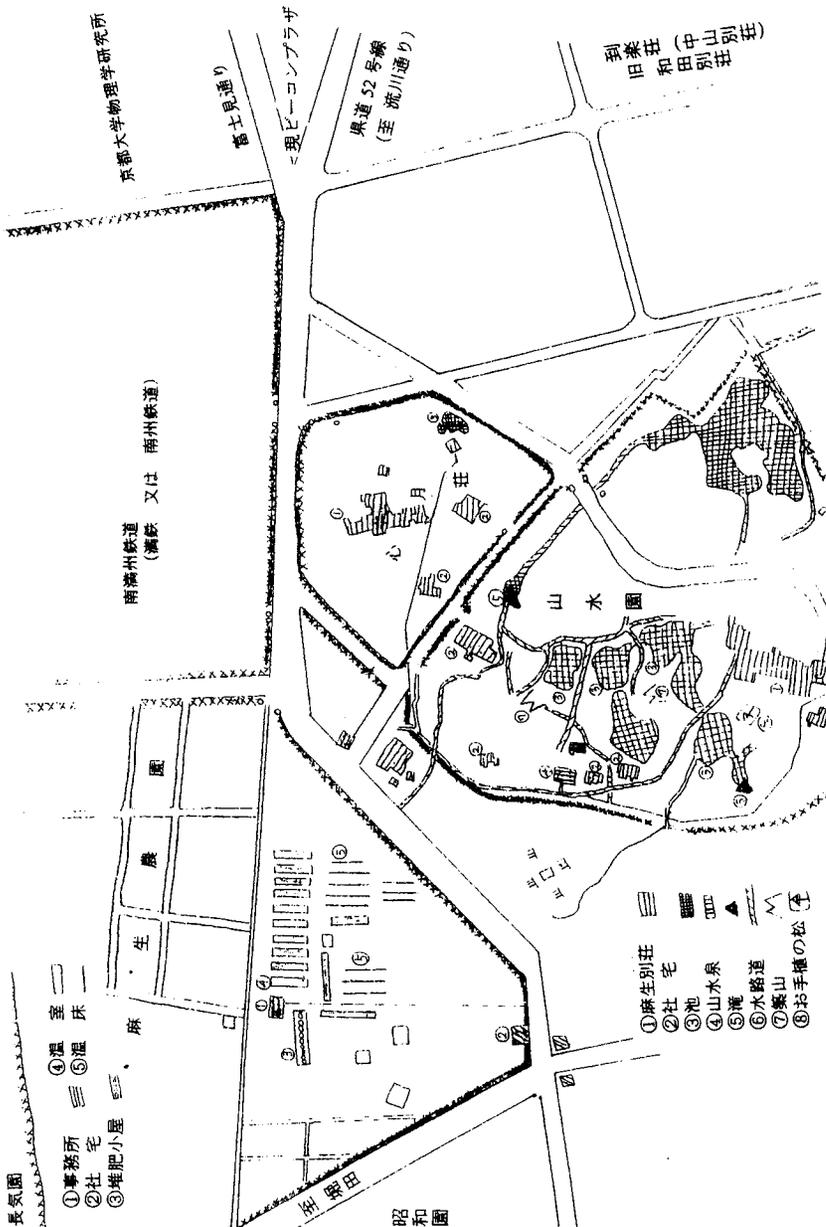
利養荘 (中山別荘)  
旧 和田別荘

南満州鉄道 (滿鉄) 又は 南州鉄道

昭和園

### 山水園地図

- ① 麻生別荘
- ② 社宅
- ③ 池
- ④ 山水泉
- ⑤ 滝
- ⑥ 水路道
- ⑦ 築山
- ⑧ お手櫃の松



れた。太吉が御歎待申し上げ、殿下は余興の「正調博多節」、「博多にわか」を興味ふかく御観覧され、晚餐を召し上がられた。そのおり、太吉に事業上のことやその他についての御質問があった。太吉六十六歳。

殿下は御休憩後、庭前に一本の松の苗木を御手植えされた。

昭和二年（一九二七）七月、不幸にして山水園の別邸は火災にかかり、火勢は猛烈にして炎はまさに御手植えの松に迫ろうとしたとき、別邸を預かる川田十は、家屋の防火をなげうって、家人を督励してこれを守り、その結果建物は全部灰燼に帰したが、かけがえのない記念樹は一枝もそこなわなかった。当時、川田十の年齢は三十八歳。

現在、御手植えの松は台風や松くい虫の被害で枯れてしまい、誠に残念である。

太吉はまもなく別邸再建に着手した。今度は万一にも貴賓の御成りに備えて、すこぶる荘重華麗な数部屋を構築、防火の設備にも意を注いだ。

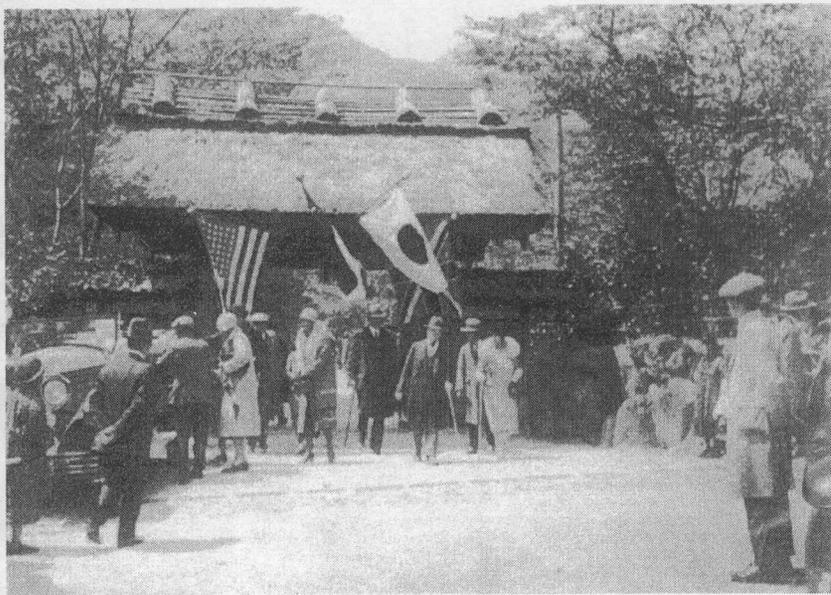
この工事中、肌寒い早朝、貴賓高き一人の老紳士が、

突然工事材料の散乱する園内に訪れ、黙々として人夫の作業を見守られた。多くの人たちは何も気づかず、人夫は老紳士の立っているあたりを右往左往していたが、ちょうど来合わせた工事監督の川田十は声をたてるほどに驚いた。

おりから別府警察署長以下数名が息せき切って馳せつけ、老紳士をうやうやしく護衛した。老紳士はそのまま山水園を出て行かれた。この老紳士こそは当時別府に御滞在中の久邇宮殿下であった。

この別荘には、大正十五年（同年十二月二十五日から昭和と改元、一九二六）二月二十一日、キューナード汽船の世界周遊船フランコニヤ号の寄港から昭和十二年（一九三七）四月、エンプレス・オブ・ブリテン号とレイアンス号の二隻まで別府港に寄港するようになり、一隻当たりおよそ三百人の観光団は流川の「亀の井ホテル」を経由してしばしば山水園を訪れるようになった。

この期間、併せて十二隻程度の世界一周途中の豪華客船が別府に寄港、桜の樹の下で園遊会を催し、観光団一行は日本の春を別府で満喫した。その中で、昭和十年四



山水園の旧正門

月に寄港したエンプレス・オブ・ブリテン号（四万二千トン）には、名優のチャーリー・チャップリン、イギリスの劇作家でノーベル文学賞受賞者のジョージ・バーナー・ド・ショウなど著名な顔もみられた。しかし、ショウは船から降りなかったようだ。

山水園の建物は、床の間付きの応接室や食堂、書院造りの座敷、京都仁和寺（右京区）の茶庭を模した別棟など、特筆されるべき特徴を豊富に備えており、県内において最も優れた別荘建築であるといえる。

応接間と食堂は屋久杉の折上格天井、板戸には京都御所風の風俗画や花鳥が描かれている。折上げとは天井の中央部を高くすること。格天井とは角材を格子状に組んで、上に板を張った天井のことをいう。

昭和天皇の皇后、良子皇太后は平成十二年（二〇〇〇）六月十六日に皇居内にある住まいの吹上大宮御所にて、九十七歳で逝去された。

川田十は几帳面な人だった。結婚前の大正六年（一九一七）から昭和三十六年（一九六一）に死去する前までの日記帳が現在三男 康氏宅に保存されている。これ

は当時流行していた博文館発行の懐中日記帳で、内容は簡潔に記されている。

日記帳とは別に日々の温泉温度や土地、管理など詳細に記された雑記帳を保有していた。後年これらが他日人目にふれることになろうとは、十氏本人も思ってもいなかったであろう。

これらの記述のなかで、最近逝去された皇太后良子殿下お手植えの松などの記事や大正十五年（一九二六）二月二十一日（晴）に初めて別府に寄港した世界一周観光団の山水園庭園での歓迎接待について、茶菓のサービスは別府市女子青年団選抜の十九人があたっていたなどの記述がなされている。毎回の入港は三月から四月の桜の時期が多く、日記には昭和十二年（一九三七）四月十三日（晴）までの山水園入園十三回目歓迎の記述がある。ちなみに同年七月七日には北京ペキンの南西十五キロ付近地点で蘆溝橋事件が発生し、日中戦争が開始されている。

大正十三年（一九二四）四月に市制が施行され、別府町から別府市となった。

## 五 別府地区開発への取り組み

昭和三年（一九二八）、麻生太吉は麻生家家訓「程度大切、油断大敵」を創定する。

泉彦蔵著の「麻生太吉傳」によれば、「麻生太吉翁は終始かわらず土地が好きであった。土を愛する心、それがいつも翁のどこかに潜んでいる。それは、生まれながらに抱いた農業人のささやきともいうものであろう」と記されている。

昭和初期、当時の麻生家の別府町内に有する土地は四万坪（一三万二千平方メートル）、隣接地石垣村に十萬坪（三三万平方メートル）、同じく朝日村に六万坪（一九万八千平方メートル）、合計二十万坪（六六万平方メートル、六六ヘクタール）に達していた。

この地に土地を有したそもその機縁は、明治四十三年頃（一九一〇）、太吉が別府田の湯地区の古別荘、五六庵および程道庵を義理半分で買い受けさせられ、これに若干の修理を加えて、自分用の別荘に当てたことから始まっている。太吉五十三歳。

五六庵用地はのち都市計画による道路建設のため別府

市に寄贈され、昭和三年（一九二八）三月、吉田鉄郎氏の設計による別府市公会堂（田の湯区）が建てられた。

その際、五六庵の建物は市長公舎となり、その一部は公民館の結婚式場となっていた。公会堂は昭和二十四年（一九四九）に別府市中央公民館と改称される。

市長公舎および公民館の結婚式場は昭和十五年（一九四〇）頃取り壊され、五十七年には長州藩士井上馨侯（当時の名は閔太）が慶応元年（一八六五）に別府で潜伏していた旅籠「若彦屋」の離れ、「史跡千辛万苦之場」の建物が公民館敷地内の北西側から北東側に移設されている。このことは別府史談第七号、「井上馨侯の別府潜伏とその前後」長谷部吉貞氏著にくわしい。

別府史談、第九号、「間宮英宗の来別に関して」佐藤嘉一氏著によれば、程道庵は（株）麻生商店の会社社員寮として、また臨済宗管長間宮英宗老師が昭和二年（一九二七）頃から大分、別府での禅の普及を目的として来別し、啓発活動の宿泊場所として帰依した麻生太吉が提供していた。当時、英宗の年齢は五十七歳。

現在の中央公民館の辺りに麻生別荘（五六庵）があっ

て、都市計画により南北に横断する道路（流川八丁目から中央公民館前通り）を造ることから、その庭が区切られて様子も変わった経緯があるが、道路の開通以前に英宗はその別荘を禅の修養道場とし、名付けて程道会と称した。

間宮英宗は明治四年（一八七二）十月一日、愛知県中島郡、間宮吉雄の次男として誕生。九歳で出家した。大正七年（一九一八）十二月から大正十五年（一九二六）十月まで静岡県引佐郡の方広寺の管長に就任する。昭和二十年（一九四五）三月、戦時中の中国で死去した。享年七十五歳。

太吉は風光明媚で温泉の出る別府への愛着がわいた。付近の住民からの求めに応じて、次第に買い求めたのが、二十万坪に及んだ。

太吉は常に、別府は泉質も多種で泉量も多いが、現在のように濫掘すれば必ず枯渇するであろうと考えていた。この憂慮は太吉の温泉引湯計画となって実現したのである。すなわち湯量豊富な山の手の泉源から堀田方面、あるいは鉄輪へ土管を通じて大量の温泉を輸送する計画で

ある。

太吉の命令を受けた調査員は、観海寺方面に出張して試掘調査にかかった。その後まもなく、鳥ヶ湯（南立石板地の南側）、立石、中須賀（板地中須賀、板地と中津留道北との中間）の泉源が発見された。その土地を買収して掘削を試みている。

立石地獄は大正十五年（一九二六）八月に買収して掘削を試みた。湧出量は一分間二百六十リットルに達した。板地・中須賀、両地獄も同年開鑿した。併せて一分間に二百六十リットル。鳥ヶ湯は自然湧出で、一分間に百八十リットル。その他併せて湧出量は一分間九百リットルに達した。

岩盤を貫いて三、四十メートルを掘削し、更に無数の小さい横穴をつけるのである。

それによって高熱の水蒸気を噴出させ、これに大鉄箱を被せ、あらかじめ湯布院方面で探りえた鉱泉を誘導して箱の中に注ぐ。地熱作用による高温度の蒸気中に冷たい鉱泉を通せばたちまち熱湯となり、鉄管を取って流出するもの一秒間に三・六立方メートル（三千六百リット

ル）に達する。それが土管によって、鳥ヶ湯、立石、中須賀から、八幡間歌温泉（杉乃井パレスと鶴見山靈泉寺との中間）の東方を南下し、中津留（現旅館寅屋付近、旧旅館昭和園）に至って貯湯池に留まる。貯湯池から山水園に入り、再び東走して野口区、麻生家所有の土地、五六庵および程道庵に到着する。延長二・四キロメートル、満三年の日数で十八万円の工費を要した。大正元年（明治四十五年、一九二二）の米一俵（六十キロ）の値段は八円三十二銭である。温度は五十四・五度を超え、浴槽に入るのもなお熱すぎるほどである。これらの給湯管は現在も利用されている。

太吉の計画は成功した。この他にも、鉄輪方面を泉源とする石垣村への引湯設備も計画された。

昭和十年（一九三五）九月、石垣村、朝日村、亀川町が別府市に合併される。

杉の井ホテル下（北側）駐車場の崖下にある水道用トンネル跡は、当時「立石隧道」と呼称され、朝見川から麻生農園、山水園、満鉄療養所（満鉄館、現明豊高等学校、旧明星学園）等に雑用水として利用する水源地であっ

た。

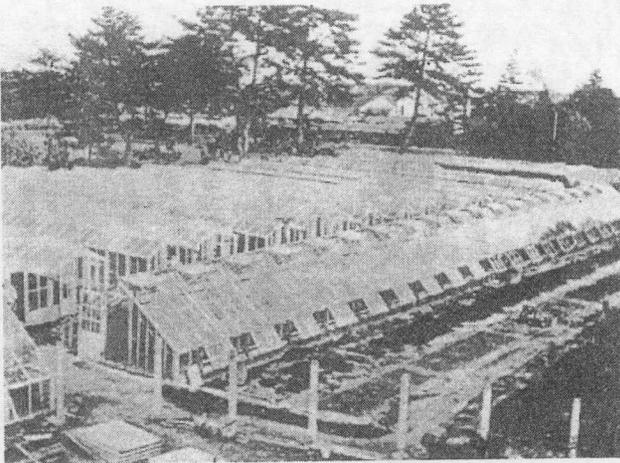
温泉水道を完成した麻生太吉は、大正十三年（一九二四）一月、更に温泉熱利用栽培に関する研究を川田十氏に命じた。温泉による温度を利用して蔬菜その他の温床栽培を試そうとする麻生農園の計画である。これは別府で本格的な温泉熱利用園芸の始まりであった。当時、太吉六十七歳、川田十は三十五歳。

麻生農園は別府市野口原の現明豊高等学校（旧明星学園、平成十一年四月から別府大学附属高校との合併による新校名）西側山手に隣接、農園面積はおよそ一万坪（三三〇アール、三万三千平方メートル）、ガラス温室棟十一棟、温床十床という規模で、各種の収穫をあげている。

ちなみに明豊高等学校の場所には以前ホテルが建っていて、これが満鉄療養所となり、昭和二十一年（一九四六）九月には小百合愛児園の分院、のち明星学園となっていた。

麻生農園は、昭和二年（一九二七）に南立石泉源地から引湯工事が完成し、温室・温床を徐々に増やし、昭和

温泉利用の温室全景



いた。

五年頃には生産品の冬のメロン、スイカ、冬瓜、キュウリ、トマト、シシトウ、玉ちしや、イチゴ、ウド、ブドウなど多くの産品が東京大阪、下関を初め、満州（現中国東北部）、朝鮮などへ出荷して

一例を挙げれば、トマトはその頃麻生農園だけにしかなく、一般には見たことすらもない人々が多かった。それが現在では一般家庭どこでも食べるようになった。

温泉熱を利用した野菜や花卉の促成栽培は、明治三十七年（一九〇四）、別府町の甲斐大蔵が手がけたのが初め。昭和九年頃（一九三四）、温室の経営は麻生農園、高橋農園、野口蔬菜園芸組合など四十戸、ガラス温室の規模も一千坪（三千三百平方メートル）に広がった。これらの農園では、なす、赤芽いも、芽しょうがなどの栽培が主であり、栽培指導者は川田十技師であった。麻生農園ではメロン、トマト、キュウリなど、当時では高級野菜を栽培している。

川田十氏は麻生農園の経営および山水園の管理、温泉の泉源掘削と引湯工事等の筆頭責任者であった。同氏の社宅は、山水園の当時の正門内を北西方向、塀に沿っておよそ七〇メートルの位置にあった。

川田十氏の二男武氏は、昭和四年（一九二九）二月に生まれる。

#### 六 挫折した高原電車計画

昭和四十一年（一九六六）発行の「別府今昔」是永勉氏著によれば、明治四十四年（一九一一）九月、現在

のJR日豊本線流川踏切の上から（西側）山の手、鉄輪、亀川、北浜、棧橋（まきはし）という回遊コース、および中央部には南北に結ぶ支線（旧国道沿い）をつくり電車を走らせる高原電車計画の定款（ていかん）が作られた。

会社の名前は温泉回遊鉄道株式会社。資本金百五十万円。社長には麻生太吉、専務に別府経済界の藤沢良吉、株主には東京、阪神、福岡、大分県内の有力メンバーが名を連ねた。藤沢良吉は大正十三年（一九二四）別府市制施行の当時、初代市会議員および副議長を勤め、前後八年間市政に貢献した。

大正初年（一九一三、明治四十五年）には高原電車大計画の会社ができた。本社建設用地は別府野口原、現在の京大理学部附属地球熱学研究施設（旧京都大学地球物理学研究所）のある場所（現大分県ニューライブラザの西側）だった。

新会社の仮事務所は国鉄（現JR）別府駅裏口西南側にある現田の湯町七の洋館「有志クラブ」を一時借用した。この洋館は明治四十年（一九〇七）頃、市営温泉「不老泉」のうえで明治館という旅館を経営していた都

築慶次郎が知名士のクラブとして建てたものだった。都築家の娘イトエさんが久保田昭亮氏と結婚して大正七年（一九一八）から久保田医院となった。

久保田医院は内科、婦人科等を開業していたが、院長昭亮氏の死去により昭和四十七年（一九七二）に閉院された。しかし、建物の面影は現在も残されている。

当時、中央町七の市宮温泉「不老泉」付近の空き地に大量のマクラ木を積み上げ、田の湯町十三の「地方職員共済組合 別府保養所 つるみ荘」の前の空き地にはチョコレート色の電車のボデーが二台到着して置いてあった。着工前に別府海岸の埋め立てを計画していた人々が高原電車計画に猛反対のノロシを上げた。麻生太吉社長が「別府のためを思ってもくるんだのに地元が反対するならもう止めた」と高原電車の新会社を解散してしまっ

た。  
解散する直前、大正五年（一九一六）九月には北石垣の中須賀から旧国道に沿って別府駅前通りを東へ下り、海岸通りを経て流川通りを山手の西へ向かい、旧日名子ホテルに達する支線工事の「軌道敷設許可申請書」を当

時の内閣総理大臣および内務大臣あてに提出していた。

会社が解散したため不要になった野口原の本社建設用地、およそ五万平方メートル（一万五千坪）は、大正十一年（一九二二）に別府町が無償提供し、大正十三年一月、赤レンガの近代的な京大理学部附属物理学研究所が建てられた。この建物は京科大学宮繕課長の永瀬狂三氏の設計で、工費は二〇万円だった。大正十三年の米一俵（六十キロ）の価格は十五円三〇銭である。

ギリシャのイオニア式の柱頭やクラシックな様式も幾何学的な意匠でまとめ、近代温泉都市に発展しようとする頃の別府の息吹を感じさせる建築物である。この建物には、当時としては珍しく水洗トイレおよび都市ガスが引かれていた。

昭和十二年（一九三七）には火山温泉研究所、昭和三十六年（一九六一）には地球物理学研究施設となり、現在には「京大理学部附属地球熱学研究施設」と改称されている。

## 七 晩年の麻生太吉と麻生産業

大正十一年、(株)麻生商店は資本金を増大して一千五百万円とする。

昭和三年(一九二八)、麻生太吉が九州電気株式会社社長となる。

昭和八年(一九三三)、太吉が産業セメント鉄道株式会社を創立し、同社社長に就任する。

麻生太吉翁の炭坑では年々算出する石炭は百万トンを突破し、その従業員は昭和八年十一月末の統計によると、職員五百余名・稼働者八千余名を数えた。

麻生太吉は昭和八年十一月七日病となり、同年十二月八日、飯塚市の自邸で死去した。享年七十七歳。特旨従五位に除せられる。

翌昭和九年、太吉の孫、三男太郎の長男にあたる麻生太賀吉が社長に就任する。太賀吉二十三歳。

麻生太賀吉麻生産業(株)会長は昭和五十五年(一九八〇)に死去した。享年六十一歳。

太賀吉の長男麻生太郎氏は昭和十五年(一九四〇)九月二十日に生まれ、昭和四十八年(一九七三)五月に三

代目の社長に就任した。その後、社長職を譲り、政界に進出して文部政務次官および経済企画庁長官を歴任し、現在も衆議院議員として活躍されている。太郎議員は太吉の三男太郎の孫にあたる。

麻生セメント株式会社を中核とする麻生グループは、明治五年(一八七二)、創業者、麻生太吉が目尾御用炭田を採掘し石炭事業に着手して、平成十二年(二〇〇〇)には百二十五周年を迎えた。現在、セメント、健康・医療・福祉関連事業、地域開発、環境関連事業、商社・流通事業、教育関連事業、コンピュータ・ソフト開発関連事業、人材派遣事業など、九十社を数えるグループ企業を有する。

麻生グループの平成十年十月現在の社員はおよそ五千四百八十人、平成九年度の総売上高は一千八百億円に達している。

## 八 その後の川田技師

川田十氏夫人ヒサは明治三十年(一八九七)七月三十一日、徳島県に生まれる。大正九年(一九二〇)一月に



晩年の田川十氏

川田氏と結婚後、三男一女をもうけた。家事専業主婦として、また戦前、戦中は国防愛国婦人会で活躍する。平成二年（一九九〇）二月二十二日に死去。享年九十二歳。昭和十四年（一九三九）頃から戦争色が濃くなった。麻生農園でも、温室もの蔬菜類は食糧増産のため甘藷などの生産や苗づくり、国防婦人会が農園の一部を利用するようになった。また秋には傷痍軍人の慰安の場となり、国防婦人会主催のいも堀り大会や演芸大会が催されていた。

昭和十五年六月発行の「園芸功労者業績録 全」によれば、社団法人 日本園芸会は明治二十二年（一八八九）に創立し、昭和十四年には満五十周年の記念事業として園芸業の発達に多大の貢献をなした地方功労者の功績を表彰することになった。川田十氏は大分県知事推薦園芸功労者（一名）、蔬菜高等栽培および指導功労者として受賞されている。

昭和十八年（一九四三）二月、川田十氏は麻生商店（株）を五十五歳で退職、翌十九年四月、別府市役所の嘱託技師として農業指導を担当した。

戦中戦後は食糧難のため、唐イモ、トマト、キュウリ苗を別府市借り上げの農場で仕立て、市民に配布した。また、花卉、イチジクの苗等も配布し、市内各地域（古賀原はじめ朝日、東山、亀川、石垣、南立石、浜脇、野口地区）などで公民館青年学級園芸組合、生産組合等で実地指導、講演会や生産品の品評会を催し、審査などを行い、別府市の園芸活動（花卉、蔬菜類、果樹）の向上に努力していた。

昭和二十三年（一九四八）から毎月五日には家庭園芸

講座を別府市中央公民館で昭和三十六年（一九六一）まで催し、好評を得ている。

また、全県下に先駆け、先進地視察や中央から有名な大学教授など講師を招き、農業講座開催も実施していた。

別府のお土産としてザボン漬けがあるが、あのザボン漬けの原料は鹿児島県阿久根市からのものであり、川田十が地域生産を切望して、昭和三十一年（一九五六）に市内野田姫山北側において市営ザボン園の開園となった。阿久根市は鹿児島県西北部、天草灘に面する市で、ボンタンなどミカン類も特産品となっている。

現在、別府市営のザボン園では、二・五ヘクタール（二万五千坪）、樹木約二百本、年間二万個の収穫がある。別府市では現在も旅館やおみやげ品店に配布している。

川田氏は、市内高原地帯にある志高の別府リンゴ園の開園にあたり、当時の社長山本文士氏への栽培技術指導を行い、長野県などへ先進地視察をしていた。別府リンゴ園は別府市枝郷にあり、志高湖および神楽女湖の南東に位置している。

戦後は、土地改革やエネルギー革命で石炭産業は斜陽

産業となる。（株）麻生商店も同様で業種の転換を図り、現在は会社自体盛り返しているが、戦後別府の山水園、麻生農園の管理は財政的な問題や農業技術者の不足で、戦前の華やかな姿は見られなくなっていた。山水園も昭和五十八年（一九八三）には庭園の大半が宅地開発され「住宅分譲地 山水苑」となっている。

エネルギー革命とは、エネルギー消費の構成が大きく変化すること。第二次大戦後（昭和二〇年、一九四五）、中東の豊富な石油資源が開発され、またタンカーの大型化による輸送費の低下、石油化学などの石油利用技術の発展により、発電用、船舶用、その他燃料の全分野で石油が石炭を圧倒した。この傾向は一九四〇年代末（昭和二十四年）に始まり、特にスエズ動乱後の一九五〇年代末（昭和三十四年）から顕著になった。一般にはこの石炭から石油へのエネルギー資源の転換をさす。

川田十氏は常に農業技術向上に努め、昭和三十六年（一九六一）七月二十八日の死去まで現役で新しい技術への研究を行っていた。享年七十二歳。

十氏の長男計は、東京農大を卒業後、農林省および大

分県農業技術センター、最後には「別府市みどりの相談所」に勤務した。平成十年（一九九八）七月に死去。享年七十八歳。

二男武は、農林省八ヶ岳（長野県）農業講習所を卒業後、北海道の農林省関係機関に勤務する。昭和五十六年（一九八一）十月に死去。享年五十三歳。

川田十氏の三男 川田 康氏（現大畑公民館長）は平成十三年（二〇〇一）七月に父十氏の四十年祭を予定されている。

最後になりましたが、記事取材や参考資料等に御協力いただきました別府市大畑在住のお二人、川田十氏の三男川田 康氏および姉上の山村（旧姓 川田）その子様へ、紙上をお借りして厚く御礼申し上げます。（終）

#### 引用参考資料

麻生太吉傳 泉彦藏 昭和九年 第一書房  
麻生太吉翁傳 麻生太吉翁刊行会

昭和十年 麻生太賀吉

麻生百年史 昭和五十年四月 創思社出版

川田十氏日記

川田十氏メモ（雑記帳）

大分県歴史人物事典 平成八年 大分合同新聞社

大別府人物史 昭和十年 網中幸義 温泉タイムス社

別府近代建築 ホームページ

別府市誌 昭和八年

別府市誌 昭和六十年

園芸功労者業績録 全 昭和十五年六月

社団法人 日本園芸会編

大分合同新聞 二一世紀への遺産 街並みと建築

平成十二年五月 村松幸彦

マイペディア 日立デジタル平凡社

別府史談 第九号 間宮英宗の来別に関して 佐藤嘉一

別府八湯 別府温泉 山の手レトロ散策マップ

名建築めぐり

別府温泉歴史略年表 堀藤吉郎著 別府民間伝承研究会

昭和四十一年四月

別府山水園地図